

松谷みよ子『あかちゃんのうた』の用語分析による 乳児期の語彙習得に関する一考察

A Study of Vocabulary Acquisition in Infancy by Lexical Analysis of “Akachan no Uta” Written by Miyoko-Matsutani

山田 丈美
Takemi YAMADA

本研究では、松谷みよ子作の絵本『あかちゃんのうた』に見られる用語分析を行った。分析方法として、この絵本に収録されている小作品14編に使用されている言葉を単語レベルで区切り、種類と使用頻度を調査した。その結果、用語の種類を以下のように分類し、言葉の特徴について考察した。(1) 体に関するもの、擬音語擬態語、動作・様態に関するもの (2) 人に関するもの、動物に関するもの、自然・植物に関するもの (3) 挨拶・対話に関するもの (4) 生活に関するもの (5) 感覚・認識に関するもの、以上の5分類である。この5分類による用語分析の結果や語相互の関係についての考察をもとに、絵本『あかちゃんのうた』が乳児期の語彙習得に果たす役割と影響について考える。

キーワード：絵本 語彙分析 コミュニケーション

はじめに

ウィトゲンシュタインの言説「概念をまだ持っていない人には、私はその言葉の使い方を、事例によって、また練習によって教えるだろう。」について、今井康雄(2010)は、以下のように解説している。

「かなしい」「かわいい」といった言葉の意味を、われわれはまさに事例と練習によって学ぶのであり、そうした言葉についての説明は事後的にのみ意味を持つ。

「かなしい」「かわいい」といった言葉を学ぶことは、同時にある種の知覚と感情の様式を身につけることにもなる⁽¹⁾

ウィトゲンシュタインの言う「事例」と「練習」、今井の言う「知覚と感情の様式」を考え合わせるとき、生まれて間もない乳幼児期からの日常的な言語体験が非常に重要となる。その時期に、概念以前の知覚と感情を形成することになるからである。

研究目的

乳児期の具体的な言語体験の場面、すなわち、赤ちゃんに対して母親がどのような言葉かけをしているかを、日常の場面として切り取って描いた絵本に、1971年初版の松谷みよ子作『あかちゃんのうた』⁽²⁾がある。この絵本の挿絵を描いているのは、いわさきちひろである。

挿絵により、母子の言葉を介しての「事例」と「練習」の場面が、より視覚的に鮮やかにイメージできる。

本論文では、松谷みよ子の『あかちゃんのうた』の用語分析を行い、そこに見られる乳児期における語彙習得の「事例」と「練習」のあり方、語彙習得と「知覚と感情の様式」の習得との関連について具体的に分析・考察したい。

研究方法

松谷みよ子作『あかちゃんのうた』に使われている語句に着目し、以下のような手順で研究を進めることとする。

1. 語彙の分類

『あかちゃんのうた』に収録されている小作品14編の用語を単語(やや幅を持たせた)レベルで区切り、その中の自立語において、意味や語の特性上関連性の強い語句を集めてグループとし、項目を立てて分類する。

2. 使用頻度の調査

分類した項目ごとに、主な自立語の使用頻度を調査する。語句の種類と使用頻度により、『あかちゃんのうた』における語彙の特徴を明らかにする。

3. 「知覚と感情の様式」習得に関わる分析

ウィトゲンシュタインや今井が述べている、「言葉の意味を、われわれはまさに事例と練習によって学ぶ」「言

葉を学ぶことは、同時にある種の知覚と感情の様式を身につけることにもなる」との観点から、調査結果をさらに分析する。特に、語彙の習得が、「知覚と感情の様式」の習得へと繋がる可能性について考える。

結果と分析

1. 語彙の分類

『あかちゃんのうた』を単語(文節)ごとに区切り、主に自立語について、意味の上で、あるいは語句の特性上、関連性の強い語句を集め、(1)～(5)の5つに分類した。

- (1) 体に関するもの、擬音語擬態語、動作・様態に関するもの
- (2) 人に関するもの、動物に関するもの、自然・植物に関するもの
- (3) 挨拶・対話に関するもの
- (4) 生活に関するもの
- (5) 感覚・認識に関するもの

各項目にどのような語句が属するかは、次の2で明らかにすることとする。

2. 使用頻度の調査結果

(1)～(5)の各グループについて、それぞれに属する語句とその使用頻度を調査した。調査結果を以下の表で示すこととする(表中の数字は使用頻度数を表す)。

- (1) 体に関するもの、擬音語擬態語、動作・様態に関するものとその頻度

(表1) 体に関する語句、擬音語擬態語、動作・様態に関する語句の種類とその頻度

体に関する語句					
語句	頻度	語句	頻度	語句	頻度
あんよ	5	ほっぺ	4	おてて	4
おむつ	3	おみみ	2	めんめ	1
手	1	おめめ	1	おへそ	1
おしり	1	おくち	1		
擬音語擬態語					
語句	頻度	語句	頻度	語句	頻度
キュッ	5	ブブー	4		
ばたばた	4	ちょち	4		
クチュ	4	ガコ	4		
くちゅ	3	ぼん	3		
こっつんこ	2	ポッカン	2		
クククク	2	ビューン	2		
てんてん	2	ぽんぽん	1		
パッパン	1	パチン	1		
とろとろ	1	ちらちら(してる)	1		
すべすべ	1	ウウー	1		

ここにこ			
1			
動作・様態に関する語句			
語句	頻度	語句	頻度
のび(伸びる)	8	わらう	7
はねる	5	たつ(立つ)	5
にる(似る)	5	かいぐり	4
だいどう	2	ふりふり(振り振り)	2
ふる	1	ころり	2
あるく	2	もぐる	1
ふりこぼす	1	なく	1
とまる	1	つぶる	1
つかまる	1	たっち	1
だっこ	1	けつとばす	1

(表1)では、体のさまざまな部分の名称と、その動作にかかわる語句が並んでいる。擬音語擬態語も動作にかかわっての使用が多い。「これは～です」という提示形式ではなく、擬音語擬態語を用いながら母子がスキンシップを図る場面で、自然に体の部位の名称を覚えていく形となっている。例えば、作品「おでこと おでこが」の書き出しは、以下のようなものである。

おでこと おでこが
こっつんこ
おはなと おはなも
こっつんこ

この作品には、母子の額と額と合わせる場面のいわさきちひろによる挿絵が添えられている。ウィトゲンシュタインや今井の言う、言葉の使い方についての「事例」や「練習」を視覚化したものと見ることができる。言葉と絵により、赤ちゃんへの語りかけやスキンシップの場面をイメージしやすい。読者である母親が赤ちゃんへの接し方において学ぶことも多いと思われる。

- (2) 人に関するもの、動物に関するもの、自然・植物に関するものとその頻度

(表2) 人に関する語句、動物に関する語句、自然・植物に関する語句の種類とその頻度

人に関する語句					
語句	頻度	語句	頻度	語句	頻度
こうちゃん	4	だあれ	3	ぼく	2
ふうちゃん	2	ひと	2	おとうさん	2
おかあさん	2	モモちゃん	1	みんな	1
ママ	1	パパ	1	おばあちゃん	1
おねえちゃん	1	おじいちゃん	1		

動物に関する語句			
語句	頻度	語句	頻度
にゃあにゃ	5	わんわん	4
とつとのめ	2	きんととちゃん	2
おしっぽ	2	うさぎ	2
あひるちゃん	2	どらにゃんにゃ	1
ちょうちょ	1	ことり	1
くまちゃん	1	きんぎょ	1
自然・植物に関する語句			
語句	頻度	語句	頻度
おひさま	4	花	3
お花	1	花ざかり	2
のはら	1	お山	2
おやま	1	おつきさま	1
おそら	1	さくら	1
ばら	1	木の葉	1

(表2)は、人に関する語句、動物に関する語句、自然・植物に関する語句について、その頻度を示した結果である。表中の語句が多く使われている作品「ねんねのおはなし」には、以下のような一節がある。

ねんねよ おねんね
 おやすみなさい
 おとうさんも おやすみ
 おかあさんも おやすみ
 おつきさまも おやすみ
 くまちゃんも おやすみ
 ごほんも おやすみ
 (中略)
 きんぎょも ねんね
 ことりも ねんね
 にゃあにゃも ねんね
 わんわんも ねんね

この作品は、人、自然、動物、日常目にする物に対する語りかけがそのまま言語作品となっているものである。乳幼児向け絵本によくある動物が主人公の設定ではなく、あくまで日常生活における母子の視点で書かれている。また、それぞれを「これは～です」というような提示形式で表現するのではなく、母子を取り巻くものへの語りかけの形で様子が表現されている。擬人化して表現されている場合も、あくまで乳幼児の日常理解の範囲内の表現となっている。

作者松谷みよ子は、以下のように述べている。

この絵本には、語りかけのことばが全部入ってまずでしょ？ 認識絵本と違って、これはうさぎです、じゃなくってね、物語になっている。それが、あか

ちゃんは好きなんだと思うんですよ。ちゃんとわかるんですよ、いろんなことばが⁽³⁾

このように、語りかけの物語であるところに『あかちゃんのうた』の特徴がある。使用語彙から見ても、「わんわん」のような幼児語や、「おやま」のように「お～」という形で、母親が乳幼児に話す際に使う表現が多い。戸田須恵子(2005)は、以下のような興味深い報告をしている。

母子コミュニケーションにおける乳児に話しかける母親のことばの特徴は、乳児の声を模倣したり、繰り返しや、MothereseやBaby Talk(幼児語)で反応することが多い。3ヶ月児と母親の相互作用を観察した日米比較研究で(Toda, et al., 1990)、日本の母親の話しかけの特徴は、無意味ことばや乳児の名前を言ったりすることが多く、幼児語は、アメリカの母親より6倍多く使用していたことを報告している。何故日本の母親は幼児語を多く使用するか分からないが、英語と比較して日本の幼児語といわれることばは非常に豊富である。⁽⁴⁾

『あかちゃんのうた』においても、戸田が述べているような、日本の母親が幼児語を多く使用するという言葉かけの特徴がそのまま反映されているといえる。したがって、前掲の「ねんねのおはなし」での「おやすみ」「ねんね」という対象物への言葉かけは、母親の言葉であると同時に、赤ちゃんの言葉との共鳴とも解釈できるのである。

(3) 挨拶・対話に関するものとその頻度

(表3) 挨拶・対話に関する語句とその頻度

挨拶・対話に関する語句			
語句	頻度	語句	頻度
こんにちは	11	おやすみ	7
おやすみなさい	2	はなし	2
ききたい(聞く)	2		

『あかちゃんのうた』の作品中、最も使用頻度が高い語句が「こんにちは」である。これは、作品「おひさま こんにちは」で多く使われているものである。作品の冒頭は以下のようなものである。

おひさま こんにちは
 ちいさなあんよが こんにちは
 おひさま こんにちは
 ちいさなおしりが こんにちは
 まあるいぼんぼも こんにちは
 おてても ばたばた こんにちは

以上のように、「こんにちは」という言葉が、他者(人

間)との挨拶の意味ではなく、自然物や自分自身の体の一部分との一日の出会いにおいて使われている。

また、「おやすみ」「おやすみなさい」も使用頻度が高い。前掲した作品「ねんねの おはなし」では、家族や自然物、日用品・おもちゃ、動物など、子どもの周りにあるさまざまなものに「おやすみ」の言葉かけをしている。

(4) 生活に関するものとその頻度

(表4) 生活に関する語句とその頻度

生活に関する語句			
語句	頻度	語句	頻度
ねんね	8	おねんね	1
ねんねん	3	おふろ	3
ごはん	1	おしっこ	1
エプロン	1	ミルク	1
おちち	1	におい	1
でんき	1	じょうろ	1
あそぶ	1		

(表4)の語句は、赤ちゃんの睡眠・入浴・食事・遊びといった赤ちゃんの生活に関する日常語である。『あかちゃんのうた』におけるそれぞれの作品の題材とかかわっている。

(5) 認識・感覚に関するものとその頻度

(表5) 認識・感覚に関する語句とその頻度

認識に関する語句…位置・方向・日時・数・色			
語句	頻度	語句	頻度
ところ	6	ここ	5
なか	3	西	1
東	1	あした	1
いち	2	に	2
さん	1	十三	1
七つ	1	うすべにいろ	1
認識・感覚に関する語句…対人・対物			
語句	頻度	語句	頻度
あぶない	5	つめたい	4
ちいさな	4	おりこう	3
じょうず	2	いっしょ	2
なあがい	2	まあるい	1
かわいい	1	おいしそう	1
だいすき	1	いい	1
いいこ	1	いいこちゃん	1

(表5)の「認識に関する語句…位置・方向・日時・数・色」の語群は、客観的な概念の認識にかかわる語の

グループである。「西」「東」「うすべにいろ」は、赤ちゃんにしてはやや難しい語ではあるが、作品「子もりうた」で、以下のように使用されている。

お山は さくらの 花ざかり
西をむいても 花ばかり
東をむいても 花ばかり
うすべにいろの 花ざかり

「西をむいても」と「東をむいても」の続きは「花ばかり」であり、「花ざかり」ではない。「西をむいても、東をむいても」の対句表現の後には、「同じ」である意味の言葉が予想される。その意味で、この部分は「花ざかり」ではなく「花ばかり」なのである。「子もりうた」の曲調を意識したやや文語調の語彙を使用している。

一方、(表5)の「認識・感覚に関する語句」の語群は、主観的な感覚・認識にかかわる語が多い。「おりこう」「じょうず」「かわいい」「おいしそう」「だいすき」「いい」「いいこ」「いいこちゃん」など肯定的なプラスイメージの言葉が多い中で、使用頻度が一番高い語は「あぶない」である。作品「こうちゃんの じどうしゃ」の中で、以下のように使われている。

こうちゃんの じどうしゃですよ
ブブー ブブー

あぶないですよ どうてください
パパも あぶないですよ
ママも あぶないですよ
わんわんも あぶないですよ
にゃあにゃも
あぶないですよ

自動車のスピード感を楽しみながら、「あぶないですよ」という同じフレーズを繰り返すことで「あぶない」という言葉の認識を強化している。この作品には注があり、「おかあさんのひざに、むこうむきにだっこして、ひざをかるくゆすりながら、あそびます。」と記されている。あくまで母子のスキンシップの中での感覚体験と考えられる。

また、「なあがい」「まあるい」などの長音を含んだ音声的表現は、幼児語を意識した柔らかな印象となっている。

3. 「知覚と感情の様式」習得に関わる分析

以上、『あかちゃんのうた』の語句を5分類して特徴を見てきた。各グループの言葉がどのような言葉習得の「事例」と「練習」の場になりうるか、また、「知覚と感情の様式」の習得につながる可能性があるかを→で示すこととする。

- (1) 体に関するもの、擬音語擬態語、動作に関するもの
→母と子のスキンシップ
 - (2) 人に関するもの、動物に関するもの、自然・植物に関するもの→人と動物、自然への理解
 - (3) 挨拶・対話に関するもの→コミュニケーションのあり方
 - (4) 生活に関するもの→赤ちゃんの特有の生活
 - (5) 感覚・認識に関するもの→認知・認識の仕方
- 以上の(1)～(5)のうち(1)～(3)について、具体的に「知覚と感情の様式」習得の可能性を探ってみたい。

(1) 母と子のスキンシップ～ほっぺ～

「Ⅱ 2 (1) 体に関する語彙、擬音語擬態語、動作・様態に関するもの」において一部分を紹介した作品「おでこと おでこが」には、以下のような一節もある。作品の表現とどの感覚とが関連があるかをみていきたい。

おお つめたい	…触覚・聴覚
ちいさなおはなが	…視覚
おお つめたい	…触覚・聴覚
つめたいのは どーこ	…触覚・聴覚
ほっぺも つめたい	…触覚
すべすべ ほっぺ	…触覚
ばらの花の ほっぺ	…視覚
おちちのにおいの ほっぺ	…嗅覚

図1 作品「おでこと おでこが」の表現と感覚との対応

「おお つめたい」「つめたいのは どーこ」という母親の語りかけによる聴覚的刺激と共に、鼻と頬に関する実際の感覚的認識が結びつく。ここで「ほっぺ」と関連づけられている語句は、以下のものである。

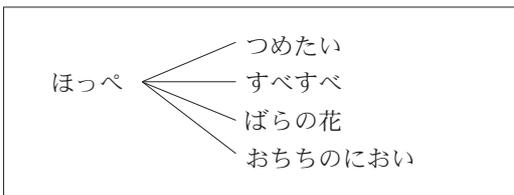


図2 「ほっぺ」に関連する語句

以上のような言葉の関連は、一般的な語の対応を越えたものであろう。『あかちゃんのうた』の解説で、波多野完治(1971)は、以下のように書いている。

文章をかかれた松谷みよ子氏は、母親が子どもに語りかける日常語を「文学語」にまで高めた人です。⁽⁵⁾

このように、一語一語を分類する作業のみでは見えてこない語相互の関係・関連を見ることにより、この絵本の特徴が明らかになる。使われているのはごく日常的

な語彙でありながら、その組み合わせや関連が独特である。さらに二例を見ていくことにする。

(2) 人と動物、自然への理解～にゃあにゃ～

『あかちゃんのうた』の作品「うちのにゃあにゃ」では、「にゃあにゃや／にゃあにゃ／おりこう にゃあにゃ」という一節がある。ここでは、「にゃあにゃ」(猫)と「おりこう」が関係づけられている。これは、母親の感性から出た言葉である。本稿「はじめに」で、取り上げた今井(2010)の以下の言葉にも通じる。

「かなしい」「かわいい」といった言葉を学ぶことは、同時にある種の知覚と感情の様式を身につけることにもなる。⁽⁶⁾

「にゃあにゃ」(猫)を「おりこう」と表現することには、絵本中の母子の「知覚と感情の様式」が反映されている。そして、「おりこうにゃあにゃ」の対比として、「どらにゃんにゃ」という言葉も提示されている。これは、「どら猫」を言い換えたものであろう。前後の関係から、「どら」という接頭語をつけた場合のニュアンスも自然に理解できるであろう。この絵本の読者である母子も、そのような「知覚と感情の様式」が自然に身につくことになる。

(3) コミュニケーションのあり方～挨拶～

『あかちゃんのうた』で使用頻度が高いのが、「こんにちは 11」「おやすみ 7」「おやすみなさい 2」の挨拶である。ここでは「こんにちは」にかかわる語相互の関係について見ることにする。

「こんにちは」という語の発信者とその対象は以下のものである。

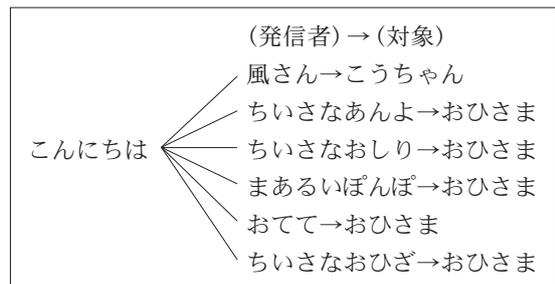


図3 「こんにちは」の発信者と発信の対象

図3で注目すべきは、「こんにちは」という挨拶が人間同士ではなく、赤ちゃん(の体の一部分)と自然物との間で、以下のように交わされる設定になっていることである。

おひさま こんにちは
ちいさなあんよが こんにちは

このコミュニケーションには、赤ちゃんとおひさまの両者を取り持つ母親の存在がある。現在の若い世代の母

親には、このようなコミュニケーションのあり方が新鮮に感じられるのではないだろうか。散歩で風を感じ、日光浴で全身を解放させる時に発する言葉として「こんにちは」を使うことで、単なる挨拶用語としてではなく、「快」の状態を他者に向かって表現することになる。それを他者あるいは自然物とのコミュニケーションの足がかりとする意味合いを含めて、この言葉の感覚的理解が促されるであろう。

考察

『あかちゃんのうた』の表現・用語について、全体的な特徴をまとめると、以下のようになる。

- i 母親が赤ちゃんに語りかける日常的な言葉で書かれており、赤ちゃん自身や赤ちゃんを取り囲む人・もの・生活等に関係する語彙が自然に、しかも整理された形で提示されている。
- ii 日常の母子のスキンシップを伴う会話形式により、「言葉」と「感覚」を関連づける構図になっている。
- iii i・iiにより、言葉の習得場面の「事例」と「練習」になっている。

以上、『あかちゃんのうた』の作品中における母子のコミュニケーションの語彙的特徴について分析考察した。

一方、その比較として、コンピュータの言語処理システムについて言及しておきたい。現在、この分野では、より人間のコミュニケーションの仕組みに近づける試みがなされている。堀口敦史・渡部広一・河岡司(2002)は、コンピュータをより人間に近づけるためには、「常識的判断システム」と「感覚的判断システム」の構築が不可欠としている。両者の関係について以下のように解説がなされている。

この「常識的判断システム」の要素技術には、五感(視覚・聴覚・嗅覚・味覚・触覚)の刺激によって得られる感覚に関する常識を判断する「感覚判断システム」がある。⁽⁷⁾

また、「感覚判断システム」について、以下のように説明されている。

感覚判断システムを実現するためには、単語とその特徴である「感覚」の関係に関する知識が必要となる。しかし、すべての名詞について論理関係を記憶させることは困難であり効率が悪い。そこで、よく使われる語を「代表語」(680語)として「感覚判断知識ベース」に持たせ、代表語から想起される感覚を登録する(例えば、「林檎」と「赤い」や、「夏」と「暑い」)。感覚判断知識ベースには、代表語と感覚の関係が計1305個登録されている。⁽⁸⁾

コンピュータでは、このように言葉の関係づけをあらかじめ入力しておく。しかし、人間の赤ちゃんの場合は、何の判断システムや概念も持たない「無」の状態にある。そこでの言葉の出会い方や言語体験は、言語の基礎形成のみならず、知覚や感情の形成にとっても非常に重要である。

前掲した「にゃあにゃ」(猫)と「おりこう」の例も、コンピュータのシステムで例に引かれている「林檎」と「赤い」、「夏」と「暑い」のような常識的な決まり切った関係づけではない。本論文の最初に掲げたウィトゲンシュタインの「概念をまだ持っていない人には、私はその言葉の使い方を、事例によって、また練習によって教えるだろう。」という言説通りである。単語と感覚を関係づけて身につけさせていく過程が、『あかちゃんのうた』に見られるスキンシップを伴ったコミュニケーションなのである。

まとめと課題

本研究では、松谷みよ子の絵本『あかちゃんのうた』に見られる語彙分析と語相互の関連の考察を行った。それは、初期段階の母子間コミュニケーションの様式を語彙の面から分析することであった。

本論文冒頭で引用したウィトゲンシュタインの言説「概念をまだ持っていない人には、私はその言葉の使い方を、事例によって、また練習によって教えるだろう。」のように、母子の日常的なコミュニケーションにおいて、語彙を習得していく「事例」と「練習」がこの絵本には提示されている。使用語彙は、語彙の特性から5分類にでき、人間形成に必要な語彙がバランスよく配置されているといえる。

鯨岡(1997)は、コミュニケーションを「感性的コミュニケーション」と「理性的コミュニケーション」の両面からとらえ、その発達の関係について、以下のように言及している。

第1に、先に現れる感性的コミュニケーションつまり原初的コミュニケーションこそ、コミュニケーションの本態であること。第2に、理性的コミュニケーションはその上に積み重なるかたちで現れること。第3に、そのとき感性的コミュニケーションはその基底に存続しつづけること。したがって両者の関係は、時間的前後というよりは基底部と上層部の関係だと言うことです。⁽⁹⁾

鯨岡の言うように、言語発達の初期段階のコミュニケーションにおいては、感性が重要であるといえる。一般的に、母子の接触時間が多いことを考えると、母親の感性は、子どもの発達の初期段階において、また、その後のコミュニケーションにおいても大きな影響を持つ。

母親のみならず、子どもは一番かかわりの深い他者の感性的影響を受けることとなる。

前述したが、『あかちゃんのうた』に見られる「おりこう」「じょうず」「かわいい」「おいしそう」「だいすき」「いい」「いいこ」「いいこちゃん」など肯定的なプラスイメージの言葉は、感性的コミュニケーションの観点から、非常に重要な役割と位置を占める。一方、「あぶない」という語が使われた場面のコミュニケーションは、単に感性的コミュニケーションというよりは、鯨岡が第2第3として掲げた基底部に感性、上層部に理性を併せ持ったコミュニケーションであるように思われる。

以上のような観点は、コンピュータをより人間に近づけるために近年なされている「常識的感覚判断システムの構築」⁽¹⁰⁾の理論にも通じる。「感覚」「感性」の領域をコンピュータシステムに網羅させようという試みがなされている。人間の母親は、コンピュータを遙かに凌ぐ「感覚」「感性」「理性」における多様性を併せ持ち、子どもの言語習得にかかわっていく。鯨岡の言うように、その様式が「基底に存続しつづける」ことを考えるとき、絵本『あかちゃんのうた』における各作品で描かれているコミュニケーションの場面を母子で体験することの意味は大きい。忙しい日常で、なかなかそのような場面を実際に体験できない場合において、この絵本で擬似体験することにもまた意味がある。そこには、作者松谷みよ子の「感覚」「感性」「理性」等のフィルターを通したコミュニケーションモデルが提示されている。

乳幼児期にそのような言語体験をしてきたかどうかということは、それ以降の子どもの言語発達や知覚や感情の形成に何らかの影響を及ぼすと考えられる。今後は、乳幼児期から学童期までをトータルに見据えて、子どもの語彙習得に関する調査・研究を行っていききたい。

〈引用文献〉

- (1) 今井康雄(2010)「メディアと国語教育－メディア論の二つの系譜から考える－」全国大学国語教育学会国語科教育研究 第119回鳴門大会研究発表要旨集 p.152
- (2) 松谷みよ子 文・いわさきちひろ 絵(1971)『あかちゃんのうた』童心社
- (3) 窪田美鈴(2006)「インタビュー『松谷みよ子あかちゃんの本』シリーズの絵本表現－シリーズの生みの親、松谷みよ子氏に聞く制作の舞台裏－」国際児童文学館紀要(19) pp. 22-32
- (4) 戸田須恵子(2005)「乳児の言語獲得と発達に関する研究」釧路論集：北海道教育大学釧路分校研究報告 37 pp.101-102
- (5) 波多野完治(1971)「母親の話しかけ」『あかちゃんのうた』解説p.31 童心社
- (6) (1)に同じ

(7) 堀口敦史・渡部広一・河岡司(2002)「常識的感覚判断システムの構築」情報処理学会研究報告「知能と複雑系」2002(105) pp.31-36

(8) (7)に同じ

(9) 鯨岡峻『原初的コミュニケーションの諸相』ミネルヴァ書房p.166

(10) (7)に同じ